

まえがき

筆者が上伊那地域を初めて訪れたのは、渡辺幸男慶應義塾大学経済学部助教授（当時）のゼミナール生としてプロジェクトの調査に同行させていただいた時である。同時期におこなっていた東京都大田区の調査で訪れた企業と比較すると、上伊那地域は技術的に真新しいものがない組立加工をおこなう企業の多い場所に見えた。当時、国内の組立加工部門は海外生産化が進む中で厳しい状況が続いており、特に地方では地域から撤退する大企業が多かった。組立加工中心の企業が多く存在する上伊那地域も、いずれ牽引してきた大企業は地域から撤退するのではないかと考えていたことが記憶に残っている。

最初の調査から10年後、再び上伊那地域を訪れると様相が変わっていた。組立加工をおこなう企業がほとんど見られなくなっていたのである。その一方で、機械加工をおこなう企業が増え、さらに元気なモノづくり中小企業300社に選ばれるような企業や、特徴的な自社製品を生み出している企業が目に付くようになっていた。また地域内大企業の大半は依然として地域に残って生産を続けていたが、地域内企業への発注はほとんどなくなっていたのである。

一体、上伊那地域では何が起きているのであろうか？

この疑問が本書をまとめるきっかけとなった。筆者はこれまでも上伊那地域を対象とする論稿を何本か発表していたが、それだけでは説明しきれないという感じが残っていた。同時に上伊那地域内で生じた変化を、一貫した論理で考えることは可能なのか全く分からない状態でもあった。研究を始めた当初、集積に関する議論が盛んにおこなわれ、筆者も集積からの視点で考えることが解決のヒントになると考えていた。その後、ポーターらが産業クラスターという概念を提示すると、集積という視点からの議論は減少することになる。本当に集積論で地域を考えることはできないのか、本書はそのような観点から

地域をとらえようと試みている。

もう一つは現実に起こっていることから考えるという視点である。地域企業、いわゆる「現場」を調査したうえで、論理を構築しようと試みている。筆者はこれまで様々なプロジェクトに参加し、年間20社程度、企業調査を行う機会に恵まれてきた。それらの調査をふまえ、生じた疑問に対し何らかの回答を得ようと努力してきた。本書はその取りまとめの一つでもある。

このように本書は上伊那地域の変化を、調査をもとに集積という視点でまとめたものである。できるだけ一貫した論理でまとめようとしたが、十分にできているとは必ずしも言えない。それでも日本の産業構造が大きく変化する中で、常に注目される大都市圏とは異なる地域で、何が生じているのかを分析することは必要であると考え、これまで発表してきた論稿を基にしつつ今回まとめることとした。

〈各章の概要〉

「序章 日本の中小企業研究における産業集積」では、産業集積・工業集積（以下、産業集積）が中小企業研究で注目され始めてから日が浅く、様々な問題が存在する。問題の一つが類型化分析である。類型化による分析では、長期間の変化が範囲外となることが多く、変化を含めた集積のダイナミズムを改めて考える必要があることを述べている。同時に、類型化分析は大都市圏の集積を中心にした分析・理論化が中心を占め、非大都市圏での集積発展に関しては、今後の研究が必要な分野であることを指摘している。

「第1章 統計からみた上伊那地域」では、リーサスデータを用いた統計から上伊那地域の産業構造を明らかにしている。当初、上伊那地域は電気部品や電気機械産業に偏っていたが、高度成長期以降、産業や業種を変化させながら今日まで発展し、現在では特定産業や企業に依存していないことが明らかになった。また地域内産業構造に変化が生じており、1990年代後半以降、機械工業の中心は従来の集積地域である伊那市・駒ヶ根市から、諏訪に近い箕輪町、辰野町の方面に中心が移っていることが明示されている。

「第2章 上伊那地域の産業構造 1—1990年代の上伊那」と「第3章 上伊那地域の産業構造 2—2000年以降の上伊那」では、地域の産業構造について年代別に分析している。まず2章では1990年代後半まで、組立機能に偏重した集積つまり「組立型集積」として存在したことを明らかにしている。組立型集積がもたらすメリットの存在が、組立作業を必要とする企業・事業所の進出を促進させ、これまで発展してきたのである。また地域中小企業の技術力は、特定産業向けに蓄積されているのではなく、組立型企業群つまり組立型中小企業集積として技術力を蓄積することで、1990年代後半まで存続しつづけたとしている。

第3章では2000年以降、特徴的だった組立型中小企業が激減していること、一方で加工型中小企業の台頭がみられることを明らかにしている。高度成長期以降、諏訪地域に生じた生産拡大と操業環境の悪化が、大企業移転と協力企業の上伊那地域への移転を招いていた。その後、諏訪からの労働者が上伊那地域へ移転し、1990年代になると地域内で加工企業として開業していた。このような動きが諏訪寄りの上伊那地域で生じ、加工企業群を叢生させたのである。2000年以降、組立型企業群は激減したが、一部の協力企業には組立部門が残っており、諏訪・上伊那地域は大規模完成品メーカーにとって国内最終生産拠点になっている事を指摘している。

「第4章 上伊那地域と諏訪地域の一体化」では、諏訪地域と上伊那地域を比較し、2000年年以降、機能面から見れば、諏訪・岡谷地域と上伊那地域とは産業集積として、一体化しつつあることを明らかにしている。

「第5章 上伊那地域における集積の形成過程と従来の議論」では、歴史的な資料を基に、戦後の上伊那地域に焦点を当て、集積の形成について検討している。従来の研究には、地域企業がなぜ構造変化に対応できたのか仕組みが明示されていない、変化への対応と集積の関係について説明されていない、などの問題が存在する。また労働集約的な組立作業をおこなってきた上伊那地域の中小企業が、なぜ地域外から需要を獲得できるようになったのか、仕組みと集積との関係を明らかにする必要があることを指摘している。

「第6章 地域内大企業が与えた影響—諏訪地域における大企業と中小企業」では、隣接する諏訪地域に焦点を当て、どのように地域外から需要を獲得するようになったのかについて調査を基に分析している。諏訪地域の中小企業群は、地域内大企業との取引関係を通じて、「アレンジ能力」や「営業-経営統合能力」を取得していた。大企業との密接な関係を前提としながら中小企業が経営活動を維持するためにこのようなノウハウを取得し、蓄積していった結果、地域外から需要を獲得できるようになったことを明らかにしている。

「終章 上伊那地域集積が示す意味」では、上伊那地域は経済環境変化に対し、様々な要因が関係しながら変化に対応してきたことを踏まえ、上伊那地域のような工業発展のありかたも、集積発展の形態の一つであることを述べている。大都市圏での産業発展の道筋もあれば、上伊那地域のような経路をたどる産業発展も一つの方向といえる。つまり上伊那地域の産業集積の事例は、地方における集積発展の経路を示すものであり、変化への対応は地域集積の持つダイナミズムの現れであることを指摘している。

なお本論の中に再編成され、組み込まれている筆者の既発表の論稿は、以下のとおりである。

- 1 糸野博行（1994）「地域活性化と中小企業—長野県上伊那地区を事例として」(財商工総合研究所『商工金融』第44巻第3号)
- 2 糸野博行（2001）「長野県上伊那地域の工業集積—組立型工業集積の事例として」『地域と社会』大阪商業大学比較地域研究所紀要、第4号
- 3 糸野博行（2003）「第五章 地方都市型産業集積の変化—長野県諏訪・岡谷地域と上伊那地域」湖中齊・前田啓一編著『産業集積の再生と中小企業』世界思想社、所収
- 4 糸野博行（2014）「第7章 大手（地元）セットメーカーが与えた影響」岸本太一・糸野博行編著『中小企業の空洞化適応—日本の現場から導き出されたモデル』同友館、所収

- 5 糸野博行（2015）「グローバル化時代の地方工業集積—長野県上伊那地域を事例として」(財商工総合研究所『商工金融』第65巻1号)
- 6 糸野博行（2019-1）「続・グローバル化時代の地方工業集積」(財商工総合研究所『商工金融』第69巻第9号)
- 7 糸野博行（2019-2）「組立型集積の衰退—長野県上伊那地域を事例として」、『大阪商業大学論集』第15巻第15号（第191・192合併号）

2024年3月

糸野 博行